

『表現学』第三号（平成一九年三月五日）抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

『トニー滝谷』の本文改訂（三）

―全作品⑧本文の性格（続）・五二箇所七八個の本文異同一覧―

森 晴彦

『トニー滝谷』の本文改訂(三)

―全作品⑧本文の性格(続)・五二箇所七八個の本文異同一覧―

森 晴 彦

はじめに

村上春樹『トニー滝谷』の本文異同について、『トニー滝谷』の本文改訂(一)―シヤネル削除による人物造形―(平二五・三)^①、『トニー滝谷』の本文改訂(二)―ショート・ロング両ヴァージョンの本文異同―(平二七・三)^②を公にし、特に(二)では、ロング・ヴァージョンc・1にあたる『村上春樹全作品1979～1989⑧』(平三、講談社。以下『全作品⑧』と略称)の本文の特徴を指摘し、『全作品⑧』を五二箇所及ぶ削除改訂をして『レキシントンの幽霊』所収のロング・ヴァージョンc・2・3版が作られていることはあまり知られてなく、決定稿と呼ぶべきはレキシントンのc・2・3であり、ショート・ヴァージョンを増補したり継承したりしながら削除や改訂する全作品⑧が保有する本文の性格は、この作品を考える上でとても重要であり、その本文の性格を顕在化するために「全作品⑧所収『トニー滝谷』本文の性格―定本との差異とその独自性が意味するものと―」(平二七・八)^③を公にし、本文の性格を具体的に考察したが、定本にあたるc・2・3文藝春秋刊単行本・文庫本との五二箇所及ぶ削除箇所についてはなお示し終えてはいないため、「全作品⑧本文の性格(続)」としてここに掲出しようとするものである。

『全作品⑧』の「全体」にあたる概要については前出の「全作品⑧所収『トニー滝谷』本文の性格―定本との差異とその独自性が意味するものと―」の稿をもって十分と考え「正篇」と位置づけ、本稿では「続篇」としてそれぞれの異同の「部分」を列挙し、本文異同を指摘していく。なお、前出の拙論は、本来「本文改訂(三)」にあたるものであるが、『全作品⑧』の本文の性格に特化して発表したため、本稿を「本文改訂(三)」と呼称することをお断りしておきたい。

本稿でも旧稿で解説を加えて見てきた『トニー滝谷』の本文について以下に簡便に分類を示しておく。

- (a) ロング・ヴァージョン
・ 未発表
- (b) ショート・ヴァージョン
・ 「文藝春秋」六八巻七号、平成二年六月(b・1)
・ 「文藝春秋短篇小説館」平成三年九月(b・2)
- (c) ロング・ヴァージョン
・ 「村上春樹全作品1979～1989⑧」平成三年七月(c・1)
・ 単行本『レキシントンの幽霊』平成八年一月(c・2)
・ 文庫本『レキシントンの幽霊』平成十一年一〇月(c・3)

この(a)(c)の四種がロング・ヴァージョンとなるのだが、(a)については、今もって未発表で、この(a)を削り、ショート・ヴァージョン(b)(正確にはb・1)を書いた、と村上本人が記している^④。

(c)に関しては、『全作品⑧』の本文は異同が多く、五二箇所にも及ぶ。つまり『全作品⑧』(c・1)は、『単行本』(c・2)『文庫本』(c・3)と比べると五二箇所も削除があるというわけである(旧稿参照^⑤および後出参照)。

それらは、ショート・ヴァージョンからの残滓もあれば、登場人物の性格描写の書き込みもあったり、主語の人称が記されていたりする、ロング・ヴァージョンへの移行過程の過渡期的本文を有している。したがって、定本的本文としては、『全作品⑧』ではなく、現在のところ文庫本『レキシントンの幽霊』が決定版本文なのである。

しかし、『全作品⑧』と『レキシントンの幽霊』の本文では、五二箇所乃至削除があり、旧稿や本稿でも言及するように改訂の度合いは大きい。

また、この削除箇所には、作品の設定や人物造形の類を一度は増補したが最終的にカットや改変したわけであり、『トニー滝谷』をよりよく理解するための村上自身による改訂記述であるにもかかわらず、旧稿以外、問題にされずに来てしまっている。

海外でも村上文学の研究は盛んであるが、『トニー滝谷』のテキストについては、『全作品⑧』が全集的な決定本文の優位性を保有していると解されやすく、『英語で読む村上春樹 TONY TAKITANI』(平五・一〇・平二六・三、NHK出版)の底本も『全作品⑧』であるし、英語版第二短篇集『めくらやなぎと眠る女』の日本語版が平成二一年に新潮社から刊行されたが、その底本も『全作品⑧』である。『靴のサイズは22』の数字のみ「22」になっているので文庫版『レキシントンの幽霊』(c・3)の改訂と同じになっている。『全作品⑧』が全集的な決定本文の優位性を保有していると認知されてしまう作用も働いているのだろう。

国内でもテキストの改変には注視されてはならず、『トニー滝谷』の初出は雑誌『文藝春秋』一九九〇年六月号、同作が一年後『村上春樹全作品 1979~1989』に収録される際に大幅に加筆修正され、一九九六年一月短篇小説集『レキシントンの幽霊』に再度収録される際にも再び全作品版に微修正が施された。『同書五二頁』と全作品までの過程もかなりアバウトに捉えられていて困るが、『レキシントンの幽霊』(c・2・3)を、「全作品版に微修正が施された」とすることは到底首肯できない。『全作品⑧』(c・1)と『レキシントンの幽霊』(c・2・3)を区別しない見解はいただけない(このあたりは旧稿三篇も参照いただきたい)。そして本稿で以下に示す対照をご覧いただければ一目瞭然である。

繰り返すが、定本的本文としては、『全作品⑧』ではなく、現在のところ文庫本『レキシントンの幽霊』が決定版本本文なのである。

なお、本稿では『レキシントンの幽霊』を「単行本」(c・2)と「文庫本」(c・3)に区分はするが、「『レキシントンの幽霊』」と一括して文庫本(c・3)で代表させるのは、旧稿でも説明しているが、『レキシントンの幽霊』の単行本(c・2)と文庫本(c・3)の本文異同が、全くないと言えるからである。

文庫本(c・3)と単行本(c・2)には、四箇所異同があるが、ほぼ同一本文と見做すことができるためである。異同は、文庫一二五頁二行目の「崇つて、一一

六頁五行目の「美味いもの」、一三二頁四行目「憑かれた」の三箇所ルビが付されたことと、単行本一四八頁「靴のサイズ22」が文庫本一三五頁では「靴のサイズ22」とされる四箇所^⑨だけである。ルビは文庫化にあたって編集上付されたものである。本稿では旧稿「全作品⑧」所収『トニー滝谷』本文の性格―定本との差異とその独自性が意味するものと―の際、割愛せざるをえなかった『レキシントンの幽霊』単行本(c・2)文庫本(c・3)との五二箇所乃至削除改訂すべてについて掲出する。

『全作品⑧』と『レキシントンの幽霊』の本文異同一覧

さて、以下に、『全作品⑧』(c・1)と『レキシントンの幽霊』文庫本(c・3)の対照表を掲出するのだが、旧稿で指摘した「五二箇所乃至削除」について説明しておきたい。旧稿では紙数の関係で異同をすべて明示できないので、混乱を避けるため、形式段落等ひとかたまりの近いところで複数箇所の削除がある場合、便宜上、一と数え「五二箇所」として表示したが、今回掲出した一覧を、覧になれば判るが、ひとかたまりの文章内での複数の削除等も個別に一と数えるならば、厳密に数を示すとするは、「五二箇所七八個の削除や改訂がある」とするのが精確であろう。

五二箇所^⑩、とした削除等の改訂は、詳細に言えば「五二箇所七八個」の削除改訂がなされているのである。

それでは順次、掲出していくことにする。

なお、通し番号の見方だが、「【二〇】(三二)」は、二〇箇所目で、括弧内の三二はここまでの異同総数を示す。したがって「【一】は計「五二」、(一)は計「七八」となるわけである。厳密に改訂数を掲出するなら七八の削除改訂があるわけである。

『村上春樹全作品 1979~1989』平成三年七月(c・1)を「(c・1) ロング・ヴァージョン(全作品⑧)」として先に掲出し、文庫文庫本『レキシントンの幽霊』平成一年一〇月(c・3)を「(c・3) ロング・ヴァージョン(文庫本)」として続けて掲出する。

記号関係は、『全作品⑧』(c・1)にあるが『レキシントンの幽霊』文庫本(c・3)で削除された箇所は□で囲んだ。文庫本で新たに挿入された文言に二重傍線を付した。また、改訂の場合、囲みではなく両方に二重傍線を付した。

【一】(一)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

好きにトロンボーンが吹けて、まずまずの食事が一日に三度食べられて、女が何人かまわりにいれば、それ以上はとくに何も望まなかった。彼は謙虚であり、同時に傲慢な男だった。本質的にはおそろしく身勝手な人間ではあつたけれど、普段はまわりの人間に対して非常に親切で気持ちの良い人間だった。だから大抵の人間は彼のことを好いた。若くて男っぷりがよくて、おまけに楽器の腕もいいときているから、どこに行つても雪の日のカラスのように目立った。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

好きにトロンボーンが吹けて、まずまずの食事が一日に三度食べられて、女が何人かまわりにいれば、それ以上はとくに何も望まなかった。

大抵の人間は彼のことを好いた。若くて男っぷりがよくて、おまけに楽器の腕もいいときているから、どこに行つても雪の日のカラスのように目立った。

【二】(三)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

これはまさに滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死のあいだには、文字通り髪の毛一本くらいの隙間しかなかった。おそらく自分はこの死ぬことになるのだらうと彼は思った。死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死のあいだには、文字通り髪の毛一本くらいの隙間しかなかった。死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった。

【三】(四)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ここであつさり殺されたとしても文句の言えるような義理はなかった。まあこんなものだろう。贅沢は言えない。この戦争では何百万という数の日本人が死んだんだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ここであつさり殺されたとしても文句の言えるような義理はなかった。この戦争

では何百万という数の日本人が死んだんだ。

【四】(五)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかし結局ところ、滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった。生き残つたもうひとりの高級将校はほとんど頭がおかしくなつていた。彼は引揚げ船のデッキに立つて、やつてきたときとは逆にだんだん遠ざかつて小さくなつていく上海の街を眺めながら、人生というのはわからんものだなと思つた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかし結局ところ、滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった。

【五】(六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

もちろん欠落感のようなものはあつた。しかし人間が生きていくというのは多かれ少なかれそういうものなのだろうと彼は思った。どのみち人はいつかひとりぼっちになつてしまふものなのだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

もちろん欠落感のようなものはあつた。しかしどのみち人はいつかひとりぼっちになつてしまふものなのだ。

【六】(七)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ひとりぼっちになつたからといって誰かに文句の言えるような歳でもない。彼はいくつかまとめて年をとつたような気がした。でもそれだけだった。それ以上の感情はとくに湧いてこなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ひとりぼっちになつたからといって誰かに文句の言えるような歳でもない。いくつかまとめて年をとつたような気がした。でもそれだけだった。それ以上の感情はとくに湧いてこなかった。

【七】(八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

滝谷省三郎はそれについていっただいどう感じればいいのか、自分でもよくわからなかった。彼はそういう感情に対して不案内だったのだ。彼は死というものをうまく

的確に捉えることができなかった。彼にできるのは、それを既成の事実としてそのまま吞み込んでしまうことだけだった。その結果 何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

滝谷省三郎はそれについていっただいどう感じればいいのか、自分でもよくわからなかった。彼はそういう感情に対して不案内だったのだ。何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。

【八】 (二〇)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかしそんな名前をつけられた子供にとつて、人生は決して安楽なバラの寢床ではなかった。学校では混血とからかわれたし、彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするが、あるいはちよつと嫌な顔をした。多くの人はそれを悪い冗談のようなものに取ったし、中には腹を立てる人間さえいた。ある種の人々はそんな名前を持った

子供を前にしただけで、古い傷口をあばかれたような気にもなった。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしそんな名前をつけられたおかげで学校では混血とからかわれたし、彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするが、あるいはちよつと嫌な顔をした。多くの人はそれを悪い冗談のようなものに取ったし、中には腹を立てる人間さえいた。

【九】 (二一)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

もちろん相変わらず数多くのガール・フレンドを作りつつけはしたけれど、そのうちの誰かを家に連れてくるようなことは一度もなかった。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

もちろんあいかわらず数多くのガール・フレンドを作りつつけはしたけれど、そのうちの誰かを家に連れてくるようなことは一度もなかった

【二〇】 (二二)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニックな絵を描き続けた。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニカルな絵を描き続けた。

【二二】 (二四)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

その極めて実際的な絵を評価するような人間は彼の周囲にほとんど存在しなかつた。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼の描く極めて実際的な絵を評価するような人間は周囲にほとんど存在しなかつた。

【二二】 (二五)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかしトニー滝谷にはクラスメイトたちの描く「思想性のある」絵のどこがいいのかさっぱり理解できなかった。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしトニー滝谷にはクラスメイトたちの描く「思想性のある」絵のどこに価値があるのかさっぱり理解できなかった。

【二三】 (二九)

【c1】 ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかしある時突然、何の前触れもなく トニー滝谷は恋に落ちた。それは本当に 理不尽なくらい唐突な出来事であった。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。彼女の歳は二十一だった。

彼女は事務所にいるあいだずっと静かな微笑みを口に浮かべていた。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、客観的に見ればとくべつに美人というほどではなかつた。

【c3】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしある時突然、トニー滝谷は恋に落ちた。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。歳は二十一だった。

彼女は事務所にいるあいだずっと静かな微笑みを口に浮かべていた。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、とりたてて美人というほどではなかった。

【二四】(二〇)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、彼にもよくわからなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、自分でもよくわからなかった。

【二五】(二四)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。そして彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が素晴らしく気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、彼はなんだかすっきり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、なんだかすっきり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだ。

【二六】(二六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女はまるで別の世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優雅に服をまとうていた。彼はこれまでそんなに楽しみに服を着ている女性を見たことがなかった。服の方も彼女の身にまとうれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼女はまるで遠い世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとっても優雅に服をまとうていた。服の方も彼女の身にまとうれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

【二七】(二七)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女が「ありがとうございます」と言って原稿を受け取って帰ったあと、しばらく彼は口もきけなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼女が「ありがとうございます」と言って原稿を受け取って帰ったあと、しばらく口もきけなかった。

【二八】(二九)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

二人の関係はもうひとつしっくりといかなくなつて、今では会う度につまらないことで口喧嘩をするようになっていた。正直に言つて、彼と会うのはトニー滝谷と会うときのように手放して楽しくはなかった。でもだからといって、その恋人との関係をすぐに切ってしまうことはできなかった。彼女には彼女なりの思いがあった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

二人の関係はもうひとつしっくりといかなくなつて、今では会う度につまらないことで口喧嘩をするようになっていた。トニー滝谷と一緒にいるときの方が楽しかった。でもだからといって、その恋人との関係をすぐに切ってしまうことはできなかった。彼女には彼女なりの思いがあった。

【一九】(三〇)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

その十五という年齢の差がこの先どういう意味を持つのか、測り兼ねた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

その十五という年齢の差がこの先どういう意味を持つのか、計り兼ねた。

【二〇】(三二)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女が考えているあいだ、トニー滝谷は地獄のような日々を送った。仕事は手につかなかった。毎日ひとりで酒を飲んだ。孤独が突然重圧となつて彼を押さえつけ、苦悶させた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼女が考えているあいだ、トニー滝谷は毎日ひとりで酒を飲んだ。仕事は手につかなかった。孤独が突然重圧となつて彼を押さえつけ、苦悶させた。

【二二】(三三)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女と結婚したことによって、トニー滝谷の人生の孤独な時期は終了した。朝目覚めると彼はまず彼女の姿を求めた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

トニー滝谷の人生の孤独な時期は終了した。朝目覚めると彼はまず彼女の姿を求めた。

【二二】(三四)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

もちろんそれはずっと昔の話だし、それに所詮子供の耳だった。でも彼にはその違いがとても重要なことであるように思えた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

もちろんそれはずっと昔の話だし、それに所詮子供の耳だった。でも彼にはその違いが重要なことであるように思えた。

【二三】(三六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ほんの僅かな違いかもしれない。でもそれはとても大事なことなのだ。彼にはそれをはつきりと感じ取ることができた。彼はステージに上がっていつて父親の腕を掴み、いったい何が違うんだい、お父さん、と問いかけてみたかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ほんの僅かな違いかもしれない。でもそれは大事なことなのだ。彼はステージに上がっていつて父親の腕を掴み、いったい何が違うんだい、お父さん、と問いかけてみたかった。

【二四】(三八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

でも彼はもちろんそんなことはしなかった。結局のところ彼にはそんな自分の思いについて何も説明できないのだ。彼は何も言わずに、水割りを飲みながら、父親のステージをずっと最後まで聴いた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

でももちろんそんなことはしなかった。彼は何も言わずに、水割りを飲みながら、父親のステージをずっと最後まで聴いた。

【二五】(三九)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

二人の結婚生活に影を落とすようなものは何ひとつ存在しなかった。彼の仕事は相変わらず順調だったし、ふたりは喧嘩ひとつしなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

二人の結婚生活に影を落とすようなものは何ひとつ存在しなかった。彼の仕事はあいかわらず順調だったし、ふたりは喧嘩ひとつしなかった。

【二六】(四〇)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかしただひとつだけトニー滝谷の気になることがあった。それは彼女があまりにも多く服を買いすぎることだった。洋服を目の前にすると、彼女はまったく言っていないくらい抑制がきかなくなってしまうた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしただひとつだけトニー滝谷の気になることがあった。それは妻があまりにも多く服を買いすぎることだった。洋服を目の前にすると、彼女はまったく言っていないくらい抑制がきかなくなってしまうた。

【二七】(四一)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

日本に戻ってきてても、その熱は収まらなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

日本に戻ってきてても、熱は収まらなかった。

【二八】(四二)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女は毎日のように洋服を買いつづけた。服の数は急速に増えていった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

来る日も来る日も洋服を買いつづけた。服の数は急速に増えていった。

【二九】(四三)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

おかげで彼は大きな洋服ダンスを幾つか注文しなくてはならなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

大きな洋服ダンスを幾つか注文しなくてはならなかった。

【三〇】(四四)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

それでも足らずに、とうとう部屋をまるごとひとつ衣装室に改造しなくてはならなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

それでも足らずに、部屋をまるごとひとつ衣装室に改造しなくてはならなかった。

【三一】(四六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

新しい服さえあれば彼女は幸せそうだった。だからトニー滝谷もそれについて文句は言うまいと思った。まあいいじゃないかと彼は思った。この世界に完全な人間なんていないのだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

新しい服さえあれば彼女は幸せそうだった。だから文句は言うまいと思った。まあいいじゃないか。この世界に完全な人間なんていないのだ。

【三二】(四八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかし妻の服の量がひとつの部屋に収まりきらないくらいになってくると、彼もいささか不安になってきた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかし妻の服の量がひとつの部屋に収まりきらないくらいになってくると、さすがに不安になってきた。

【三三】(四九)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

一度彼は妻のいないときに、その服の数を勘定してみた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

一度妻のいないときに、その服の数を勘定してみた。

【三四】(五〇)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

全部の服を着こなすのに二年近くかかった。それはいくら何でも数として多すぎ

ると彼は思った。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

全部の服を着こなすのに二年近くかかった。それはいくら何でも数として多すぎる。

【三五】(五一)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

どうしてこんなに次から次へと服を買わなくてはならないのか、彼には理解できなかった。服を買うのに忙しくて、着る暇もないくらいなのだ。これは精神の病といつてもいいのではないだろうかと彼は思った。もしそうだとしたら、どこかで彼女に歯止めをかけなくてはならない。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

どこかで歯止めをかけなくてはならない。

【三六】(五四)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ある日、夕食の終わったあとで、彼は思い切って妻に対して持ち出してみた。少し服を買うのを控えたらどうだろう、と。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ある日、夕食の終わったあとで、彼は思い切って切りだした。少し服を買うのを控えたらどうだろう、と。

【三七】(五六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

君が綺麗になるのは僕としても嬉しい、でもこんなに沢山の高価な服が現実的に必要なんだろうか。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

君が綺麗になるのは嬉しい、でもこんなに沢山の高価な服が必要なんだろうか。

【三八】(五七)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

妻は下を向いてしばらく考えていた。それからこう言った。たしかにあなたの言うとおりに思う、こんなに沢山の服は必要だと思う、それは私にもよくわかっているのよ、でもわかっていてもどうしようもないの、と彼女は言った。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

妻は下を向いてしばらく考えていた。それからこう言った。あなたの言うとおりでと思う、こんなに沢山の服は不要だと思ふ、それは私にもよくわかつているのよ、でもわかつていてもどうしようもないの、と彼女は言った。

【三九】(五八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

目の前に綺麗な服があると、私はどうしても、それを買わないわけにはいかないの。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

目の前に綺麗な服があると、私はそれを買わないわけにはいかないの。

【四〇】(五九)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ただ単に、もう買うのを止めることができなくなっちゃうのよ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ただ単に、もう買うのを止めることができなくなっちゃうのよ。まるで何かの中毒みたいに。

【四一】(六一)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかし彼女がそれを(それはまるで薬物中毒のようなものだ)と彼女は言った。なんとか治癒すると言った。こんなことを続けていたら今に家が服でいっぱいになってしまうもの。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしなんとかそこから抜け出してみると彼女は約束した。こんなことを続けていたら今に家が服でいっぱいになってしまふもの。

【四二】(六五)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

一週間はかり彼女は洋服屋に行かず、家の中にこもってじっとしていた。しかしそれは彼女にとってはひどく辛い毎日だった。空気の少ない惑星の上を歩いているような気分だった。彼女が毎日衣装室に入り、自分の服をひとつひとつ手に取って眺めて過ごした。生地を撫でまわし、匂いを嗅ぎ、袖を通して鏡の前に立ってみた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

一週間はかり彼女は新しい洋服を目にしないように、家の中にこもってじっとしていた。でもそうしていると、なんだか自分が空っぽになつてしまつたような気がした。空気の少ない惑星の上を歩いているみたいだった。毎日衣装室に入り、自分の服をひとつひとつ手に取って眺めて過ごした。生地を撫でまわし、匂いを嗅ぎ、袖を通して鏡の前に立ってみた。

【四三】(六六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

夫の言うことはたしかに正論だと思つた。こんなに沢山の服は不要なのだ。私の体はひとつしかないのだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

夫の言うことはたしかに正論だと思つた。こんなに沢山の服は不要なのだ。体はひとつしかないのだ。

【四四】(六七)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

目を開けたとき、信号が青に変わるのが見えた。彼女はほとんど無意識にアクセルを踏みこんだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

目を開けたとき、信号が青に変わるのが見えた。彼女ははじかれたように思い切りアクセルを踏みこんだ。

【四五】(六九)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

トニー滝谷に残されたのは部屋ひとつぶんのサイズ7の洋服の山だけだった。靴だけでも一二足もあつた。彼はそれをいったいどうすればいいのか、見当もつかなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

トニー滝谷に残されたのは部屋ひとつぶんのサイズ7の洋服の山だけだった。靴だけでも二百足近くあつた。それをいったいどうすればいいのか、見当もつかなかった。

【四六】(七〇)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼女は面接のために着ていった自分の服を脱いでハンガーにかけ、ブルージーンズとトレーナーシャツに着替え、床に座って冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。

【四三】 ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼女は面接のために着ていった自分の服を脱いでハンガーにかけ、ブルージーンズとトレーナーシャツに着替え、床に座って冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。

【四七】 (七二)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

トニー滝谷は結局古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた。たいた値はつかなかった。おそろく彼がその洋服のために払った金額の二十分の一にもならなかったはずだ。でもそれは彼にとつてはもうどうでもいいことだった。彼としてはただでもいいから一着残らず持つていつてほしかったのだ。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

トニー滝谷は結局古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた。たいた値はつかなかった。でもそれはもうどうでもいいことだった。彼としてはただでもいいから一着残らず持つていつてほしかったのだ。

【四八】 (七三)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼はからっぽになったそのかつての衣裳室を、そのあと何年もずっとからっぽのままにしておいた。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

彼はからっぽになったそのかつての衣裳室を、長いあいだからっぽのままにしておいた。

【四九】 (七五)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ときどき彼はその部屋に入り、何をするともなくただぼんやりしていた。彼は一時間も二時間もその床に座ってからっぽの壁をじっと眺めていた。そこには死者の影の、そのまた影があった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ときどき彼はその部屋に入り、何をするともなくただぼんやりしていた。一時間も二時間もその床に座って壁をじっと眺めていた。そこには死者の影の、そのま

た影があった。

【五〇】 (七六)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

そして彼女の静かな鳴咽が記憶の中に蘇ってきた。彼はそんなものを思い出したくはなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

そして彼女の静かな鳴咽が記憶の中に蘇ってきた。そんなものを思い出したくはなかった。

【五一】 (七八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

彼はほとんど眠るように死んでいった。そういう意味でも彼は最後までツキに恵まれていた。多少の現金と株券を別にすれば、滝谷省三郎は財産というほどのものは残さなかった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

ほとんど眠るように死んでいった。そういう意味でも彼は最後までツキに恵まれていた。多少の現金と株券を別にすれば、滝谷省三郎は財産というほどのものは残さなかった。

【五二】 (七八)

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

そのレコードの山がすっかり消えてしまうと、トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった。

(c-3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

レコードの山がすっかり消えてしまうと、トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった。

以上が、『全作品⑧』(c-1)と『レキシントンの幽霊』文庫本(c-3)との、五二箇所に分け示した七八個の本文異同である。

この本文異同を比較してみれば、削除改訂が『レキシントンの幽霊』に「再度収録される際にも再び全作品版に微修正が施された¹⁰⁾」の「微修正」ではすまないものであることは明白である。増補した箇所をさらに削ぎ落として本文の密度を高めていた

り、無駄を削除したり、主語や副詞を省いたり、人物設定を『全作品⑧』で増補した上で、その設定を落とし込んで削除したり、創作過程が明確に判明するのである。それはさらにショート・ヴァージョンを対比させて見るともっと明確化する箇所もあるのではあるが、とにかくにも『全作品⑧』と『レキシントンの幽霊』の本文批評だけでも、実に多くのことを語っているのは今見てきた通りである。

おわりに

『全作品⑧』の本文の性格は、旧稿で考察したので繰り返すは避けることにする。本稿の目的は、果せずに来た『全作品⑧』と(c・1)と『レキシントンの幽霊』文庫本(c・3)との本文異同をすべて掲出することである。

現在のところ、『全作品⑧』も文春単行本も文春文庫本も、同じテキストであるというのが一般的な理解であると思われるが、旧稿でも指摘した通り、村上はこの『全作品⑧』の本文を五二箇所七八個の削除・改訂を施しているわけである。

作品としての定本的本文としては、『全作品⑧』ではなく、文庫本『レキシントンの幽霊』が決定版本文であるが、定本でカットされた『全作品⑧』の削除・改訂本文には、設定や人物造形の構築として、ショート・ヴァージョンから増補されたものであり、実はこれらは『トニー滝谷』をよりよく理解するための記述であり、かつこの作品の創作過程を追究する際の有力なプロセスであるのは自明なことである。それは、旧稿でも指摘したつもりである。つまり、『全作品⑧』は、『トニー滝谷』を理解するためにも、この作品の創作過程を知るためにも、大変貴重なテキストなのである。

旧稿では、「本文改訂(二)」で【一】【八】【四五】を引用し、「全作品⑧所収『トニー滝谷』本文の性格」では【一】【二】【三】【四】【八】【三二】【三三】【三四】【三五】【四一】【四二】【四七】【四八】【四九】を引用し、この一五箇所を必要に応じて言及していることを付言しておく。

なお、今回はショート・ヴァージョンへの言及を避けて来たが、次の二例は示しておきたい。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

鉛筆の先を針のように尖らせて、自転車やらラジオやらエンジンやら、そういう

ものの細部をどことん細かく描くのが得意だった。花の絵を描いても、葉脈の一本一本まで克明に描いた。彼にはそういう描き方しかできなかったのだ。

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧、単行本、文庫本)

鉛筆の先を針のように尖らせて、自転車やらラジオやらエンジンやら、そういうものの細部を克明に描くのが得意だった。花の絵を描いても、葉脈の一本一本までこと細かに描いた。誰になんと言われようと、彼にはそういう描き方しかできなかったのだ。

この箇所は、『全作品⑧』も『レキシントンの幽霊』も異同がないため、前掲の「本文異同一覧」には出てこないが、ショート・ヴァージョンでの描写をロング・ヴァージョンでさらに精密画に対するトニー滝谷の強い意志について増補されている箇所である。

次は本文異同【二三】で掲出したものにショート・ヴァージョンを加えてみたものである。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

しかしある時突然、何の前触れもなく、トニー滝谷は恋に落ちた。＜相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社の＜女の子だった。彼女の歳は二十二だった。驚くような美人ではなかったが、なにかしら彼の心を打つものがあつた。

(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかしある時突然、何の前触れもなく、トニー滝谷は恋に落ちた。それは本当に理不尽なくらい唐突な出来事であつた。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。彼女の歳は二十二だった。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、客観的に見ればとくべつに美人というほどではなかった。でも彼女にはなにかしら彼の心を激しく打つものがあつた。

(c3) ロング・ヴァージョン (文庫本)

しかしある時突然、トニー滝谷は恋に落ちた。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。歳は二十二だった。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、とりたてて美人というほどではなかった。

でも彼女にはなにかしら彼の心を激しく打つものがあつた。

「何の前触れもなく」は「突然」を強調するためのもので、ロング・ヴァージョンの『全作品⑧』(c・1)に継続されながら、ロング・ヴァージョンの『レキシントンの幽霊』(c・2・3)ではカットされるわけである。

ショート・ヴァージョンの「<」は引用に際し私に加えた記号であるが、ロング・ヴァージョン『全作品⑧』(c・1)の時点で「それは本当に唐突な出来事であつた」を加えることで、いかにトニー滝谷の恋愛が突然であるのかが更に補強されたわけだが、『全作品⑧』はショート・ヴァージョンから引き継ぐ「何の前触れもなく」もあり、「それは本当に唐突な出来事であつた」もあるわけで、たまたまけが執拗すぎると考えて、『レキシントンの幽霊』(c・2・3)ではカットとなるわけである。しかし、もちろんトニー滝谷が恋に落ちることがいかに突然であつたかはこの推移で十分すぎるほど判るわけであるし、それを村上が考えていたことも判るわけである。

ショート・ヴァージョン二つ目の「<」はロング・ヴァージョン(c・1・2・3)では「アルバイトの」が挿入されていく。「出版社の女の子」は社員である可能性が高くなるが、年齢が二歳となると早生まれの女子ということになる。この不自然さの回避のために「アルバイト」が挿入されることになる。これは村上作品の改訂に見られることだが、整合性や不自然さ、問題等の回避等を改稿版で修正してくる事例に属するわけであるⁱⁱ⁾。

このように、本来ならばショート・ヴァージョンから何がロング・ヴァージョン『全作品⑧』(c・1)に受け継がれ、何が受け継がれないのか、そして『全作品⑧』(c・1)からロング・ヴァージョンの『レキシントンの幽霊』(c・2・3)へ何が受け継がれ、何が受け継がれないのか、を示すべきだが、紙数の関係もあり、旧稿では『全作品⑧』と(c・1)と『レキシントンの幽霊』文庫本(c・3)の一五箇所をいくつかにまとめて本文異同を示し、『全作品⑧』の本文の性格を考察し指摘したが、紙数の都合で本文異同すべてを掲出することはできず見送った。

それを承け、本稿では『全作品⑧』と(c・1)と『レキシントンの幽霊』文庫本(c・3)との本文異同すべてを掲出することを眼目とした。これによって『全作品⑧』の本文が『レキシントンの幽霊』では、「五二箇所七八個」の削除改訂がなされていることが一目瞭然となり、かつ『トニー滝谷』ロング・ヴァージョンの比較が簡便

にでき、それぞれのテキストの性格も判然とすると考える。

《注》

- (1) 拙論「解釋學」六七輯(平四・三)。
- (2) 拙論「解釋學」七三輯(平二七・三)。
- (3) 拙論「解釈」(解釈学)六二巻七・八号(平二七・八)。
- (4) 『村上春樹全作品 1979-1989』月報「自作を語る・新たな胎動」(平三、講談社)。「レキシントンの幽霊」単行本・文庫本のあとがき。
- (5) 注3前掲論文。
- (6) 藤井省三氏『村上春樹のなかの中国』(平一九、朝日新聞社)五二頁。
- (7) 注3前掲論文。
- (8) 注2・注3前掲論文では「美味もの」のルビを示し忘れていたため、三箇所としたが、ルビのみで三箇所あるため、「22」を加え、四箇所と訂正したい。
- (9) 以下、『全作品⑧』と『レキシントンの幽霊』の五二箇所の対照本文を掲出するが、対照を覧いたとき、五二箇所(五三箇所七八個)という区分が恣意的だと言われる場合は、「七八個の削除・改訂」を優先いただきたい。
- (10) 注6前掲書五一頁。
- (11) 前掲注1の拙論で「シャネル」削除、注3の拙論、拙論『螢』から『ノルウェイの森』へ「『螢』『ミコ』『舞姫』創作過程論の視座から」(「表現学」創刊号、平二七・三)で「緑の枝↓緑の葉、寮の問題点を思想的な立場から主人公の主観へ、「流行りの小説」その他、意識的な修正・改訂についていささか言及しているので参照いただければ幸いである。なお、ショート・ヴァージョンにはあるも、ロング・ヴァージョンでは「精神の病」(薬物中毒のようなもの)といった病理に関する直接的な言葉が削除されていることは既に『村上春樹作品研究事典』一三六頁に指摘がある。

